

8. リラクゼーション外来における運営と受診者の動向

(2) 一複合的リンパ療法の実際一

井上エリ子, 星野 仁美, 前田三枝子
 (群馬大医・附属病院・看護部)
 金子有紀子 (群馬大院・医・看護学専攻)
 小林しのぶ, 柳 奈津子, 小坂橋喜久代
 (群馬大医・保・基礎看護学)
 川田 悦夫, 田村 遵一
 (同・附属病院・総合診療部)

【はじめに】 これまで、リンパ浮腫への有効な治療法がなく続発性リンパ浮腫に悩む患者が相当数いた。本研究の目的は、複合的リンパ療法サービスについての、1年半の受診者の動向とサービスの成果を分析することである。【外来運営の実際と受診者の動向】 受診の流れは、主治医による診察と病状診断、問診、その後リンパ療法有資格者が計測・ドレナージ・症状に応じた運動療法の指導・日常生活管理の注意指導を行い、必要時バンテージ・圧迫衣のフィッティングと指導を行う。①受診者は、53名の初診者と117名の再診者があった。これまでに1件の原発性浮腫が見られた以外は、術後合併症としての続発性浮腫である。40～50歳代の中老年女性で占められており、年齢は37歳～88歳まで含まれる。男性は1名である。②受診のきっかけは、浮腫の悪化、蜂窩織炎、担当医の紹介などがある。症状が気になっていたが諦めていた人や、治療場所を求めて転々としていた者も少なくない。③受診者は、病期1(浮腫が軽度で圧迫痕が残る)と2(浮腫の程度が強くなり、圧迫痕が残らない)が多く、病期3(皮膚の角化が見られ象皮症と呼ばれる状態となる)は3名だった。④受診回数は、病期1では、セルフケア指導・圧迫衣で1～2回での終了が多い。病期2の場合は予約可能な範囲で3～5回のフォローをする。進行事例にはバンテージを使用し、集中排液、ドレナージをするため受診回数が多く、最高で19回である。

【評価と今後の課題】 ドレナージ後は患肢周囲径の計測値の減少により、浮腫の軽減が確かめられ体重減少も見られる。患者の生活状況の変化としては、階段を登れるようになった、好きなスポーツができるようになった、スカートやおしゃれな靴が履ける、買い物に行くと腕を出せるのがうれしい等、ADL・QOLの改善がみられた。平成19年4月からは、患者自身による自己管理能力の育成のために、セルフケア教室を開設した。毎回の受診者は15名を目安に基礎理論とセルフドレナージ方法を指導し、予防と啓蒙に努めている。より適切なアウトカム評価について検討していく必要がある。

9. マラリア非特異的 CD8⁺ T 細胞がマラリア病態を悪化させる

宇田川麻衣, 城下 卓也, 吉田 仁典
 山田麻衣子, 添野 祥子, 鈴江 一友
 (群馬大院・医・国際寄生虫病生態学)
 鈴木 守 (群馬大学)

マラリアは、人類の約半数が汚染地帯に住み、年間の感染者は3～5億人、死亡者は150～270万人と推定され、人類に最も甚大な被害を与えている感染症である。治療薬は存在するが、薬剤耐性を示すマラリア原虫が出現し、ワクチンの開発が望まれている状況である。

我々のグループでは、マウスにネズミマラリア致死性株 *Plasmodium berghei* NK65 を感染させ、感染時の免疫応答のなかで、何が防御免疫として働き何が増悪因子として働くかについて研究している。まず、感染免疫応答の主体であるリンパ球に着目し、T、B細胞を欠損する Rag2^{-/-}マウスに致死性株 *P. berghei* NK65 を感染させたところ、免疫系が正常な野生型マウスは約7-10日で死亡するのに対し、Rag2^{-/-}マウスは約2ヶ月も生存し続けた。またT細胞欠損マウスも同様に長期間生存し続けたことから、致死性マラリアの感染増悪にT細胞が深く関与していることが示された。ここで野生型感染マウスのT細胞を解析したところ、病原体非特異的なT細胞の活性化が示唆されたため、マラリア抗原とは全く無関係な抗原受容体のT細胞のみを持つ TCR^βマウスに *P. berghei* NK65 を感染させ、マラリア抗原非特異的T細胞を解析したところ、感染に伴ってT細胞の活性化を示すマーカーに変動が認められた。さらにマラリア抗原非特異的 TCR^βマウスの中で、CD4⁺T細胞をもつマウスはコントロールマウスと同時期に死亡したが、CD8⁺T細胞のみを持つマウスはコントロールマウスよりも有意に生存期間が短かった。これはマラリア原虫の感染に伴って原虫非特異的なT細胞の活性化が起こり、その中でCD8⁺T細胞が感染増悪に関与するというを示唆する。以上の結果から本来自己を防御すべきCD8⁺T細胞がマラリア感染時においては感染増悪因子として作用していることが示された。

10. Pilocytic astrocytoma を構成する細胞の多様性について

田中 優子, 佐々木 惇, 中里 洋一
 (群馬大院・医・病態病理学)

【目的】 Pilocytic astrocytoma (PA) では毛髪様細胞の存在が特徴的だが、oligodendroglioma 様細胞や microglia も出現していることが近年知られてきている。我々は oligodendroglia と microglia に着目し、PAにおける両細胞の抗体陽性細胞の標識率と陽性細胞の増殖能